

2013年5月25日

# 河井道とアメリカ

大山綱夫

ご紹介頂きました大山です。多摩キャンパスのスプリング・フェスティバルの講演ということで準備を始めましたが、途中で大学開学25周年記念の講演ということになり、いささか緊張もしております。さて2週間前の5月11日のリユニオンでは、落合恵子さんによる『わたしを生きる・・・自分を抱きしめてあげたい日に』と題する、素晴らしい講演がありました。その中には恵泉の精神や理念に直接触れる言葉はありませんでしたが、まるで恵泉が目指し実践してきた姿勢や方向を外側から再確認して下さっているかのように感じ、大変感激致しました。私は短大で、故望月賢一郎先生や今は大阪で牧師をしておられる森田進先生、そしてきょうここに居られる李省展先生らと共同で総合科目「国際」という必須科目を担当して参りましたが、そのリプレイに参加しているような感じさえておりました。また、当時学生たちが行っていたインターナショナル・デーの話し合いに再び参加しているようにも感じておりました。本当に素晴らしい内容でしたので、講演後私は何人かの方々に、落合さんの講演を25周年記念ということにすれば、私はもう話す必要はないのではないかと半ば冗談に申し上げました。しかし、すでに学内には私の写真入りのピラがあちこちに貼ってありましたし、お引き受けした以上責任は果たさねばなりません。そういう訳でここに立っております。

ところで5月9日、李先生と打ち合わせを致しましたとき、李先生が申し訳なさそうな声で「実は」と切り出され、同じ時間帯のもう一方のプログラムに西城秀樹さんのショーがあり、こちらの講演会の参加者は少ないかもしれない、といわれました。プログラムの「表」といわれたか「裏」といわれたか……「それはそうだろう」と思いました。このことをリユニオンの日、バスで一緒になりました大学の元学長の荒井献先生に申し上げましたら、やはり同じく「それはそうでしょう」。「でも随分昔の歌手だから」とつけ加えられました。しかし、向こうが鯨だとすれば、こちらは呑み込まれる小魚のような関係ですから、どうかと思いながらのきょうです。さて予想通りというべきか、思いのほかと

いうべきか、いずれにせよお越し下さった方々には感謝して私の意とするところを述べさせていただきますので、暫くお耳をお貸し下さい。

お手元に資料をお配りしましたが、最初の頁の語句は、私の話の中で登場するものを挙げておきました。また2枚目以降の項目に関しては、できれば全部取り上げるつもりで準備をしてきたのですが、時間の都合でかなり省きますので、ご了承下さい。

さて、私はきょうのタイトルを「河井道とアメリカ」と致しました。このようなタイトルを、例えば河井道のところに別の固有名詞を入れて、「津田梅子とアメリカ」としても現代の我々は何のこだわりもなく自然に受け入れます。しかし、かつて思想家や学者や知識人を取り上げて、その人物がアメリカから影響を受けたと論じると、ヨーロッパから影響を受けた人物より、一段低いと見られるような時代がありました。日本は1854年の開国以来、きょうこれから紹介致しますように、その前年初めて接触したアメリカから多大の影響を受けました。それにもかかわらず明治20年代の中葉、日本帝国憲法や教育勅語の発布以来、国粹主義反動の波の中で、ヨーロッパ、特にドイツを重視し、アメリカ（時にはイギリスを含めてアングロサクソン圏）を軽視する風潮が作られて行きました。精神文化のヨーロッパに比べれば、物質文明のアメリカは程度が低いとされ、このステレオタイプの説明でアメリカが学問の世界でさえ、軽視される時代が20世紀の半ば頃まで続きました。例えば1935年に出版された和辻哲郎の『風土』。日本を代表する思想書として英語にも訳されていますし、優れた作品だとされています。人間存在の風土性が和辻独自の論旨で解説されていますし、文章も魅力的です。ところが、当然取り上げられてしかるべき世界的にも知られたアメリカ人学者の学説が取り上げられていないのです。風土という点で取り上げられて当然の、地球上の大きな部分を占めるアメリカが捨象されているのです。フロンティアの存在こそアメリカ史やアメリカ文化を解説する鍵であると主張したフレデリック・ジャクソン・ターナーの説です。この説は高木八尺というアメリカ政治の学者がすでに日本に紹介していたのですが、和辻はそれを無視しました。和辻はさらに、太平洋戦争中に「アメリカの国民性」という論文を書き、機械の奴隷たるアメリカ人には文化はないと結論し、当時の「鬼畜米英」という風潮を煽りさえしました。これは17世紀のイギリス人哲学者の思想から、20世紀のアメリカ人を説明するという乱暴な作品で、彼の業績上の汚点と言ってもいいと思います。いま、アメリカ軽視の一例として和辻を取り上げた訳ですが、そもそも戦前の帝国大学の西洋史学科でアメリカ史が教えられているところはなかったといわれます。新興国アメリカは歴史学

の対象にならないとして捨象されたのです。開国直後の福沢諭吉のように関心を払わなくなってしまっていたのです。現実にはアメリカの文物は大量に流入し、日米関係は重要度を増していたにもかかわらずです。明治20年代中葉から、アジア太平洋戦争の敗戦までのそうした風潮の中で、しかし、アメリカに真面目に対面し、学ぶべきは学べと主張した例外的な学者が新渡戸稲造です。また彼の弟子の、先程出てきた高木八尺です。新渡戸は第一次大戦終結の1919年に『米国研究の急務』という論文を書き、アメリカ研究を怠れば日本の将来は危ういとさえ訴えました。しかし、和辻の作品が、その後に出ているように、学問や思想の世界はアメリカを軽視し続けたのです。また新渡戸の、札幌農学校時代からの親友内村鑑三は、少年時代からアメリカのものを呼吸し、自らの精神的なアイデンティティさえ、それとの関連の中で完成させ、またそのことゆえに自らのうちにあるアメリカ的なものと真剣に取り組み、時には苦闘しそれを文章で表現した人間です。そしてきょうのテーマの河井道。彼女もアメリカの精神文化に大きな影響を受けた人物です。彼女は新渡戸や内村のように書き残したものは多くありませんし、ふたりに比べれば与えた影響範囲は広くはありません。しかし、当時、女性にはめられていた社会的発言や活動上の枷を考えると、彼女が内なるアメリカ的なものをベースにして、非常に大事な発言や活動をした人物だったことは軽視されてはなりません。このようにアメリカ軽視が続いたにもかかわらず、その時代の良心といえるような人々は、アメリカを正視しようとしていたのです。以下、そのひとりとしての河井を取り上げます。

お手元の図表（1853年を起点として、鹿鳴館時代への上り坂の時期。日清・日露戦争を経て韓国併合を機に始まる下り坂の時期。1930年代以降急降下し、1941年の真珠湾攻撃、1945年の日本の敗戦に至るまでの日本人の対米感情の波動のグラフ）をご覧ください。これは日本とアメリカの文化、特に精神文化の接触に関連した人々の中から、きょうのテーマに関係する6人（福沢諭吉、S.C. スミス、内村鑑三、新渡戸稲造、津田梅子、河井道）を日米関係の歴史の波動のどういう時に相当したのかを対応させてみたものです。波動の一番高いところは鹿鳴館時代、戦前では日米関係が最も好感情（good feeling）だった時代です。

この波動のピークに至る時期、日米双方共、お互いに対して大変好意的な目を注いでいました。ご存知の方がおられると思いますが、万延元年の遣米使節がアメリカへ行き、ニューヨークのブロードウエーを行進したとき、たまたまそれを目にしたウォルト・ホイットマンが、その時の感動を「ブロードウエーの行列」という詩の中で歌い上げました。ホイットマンは一行の礼儀正しさと

威厳を称え、詩の最後の方で、「壮麗なマンハッタンよ！わが同胞のアメリカ人よ！われらの所へ、この時ついに東洋がやってきたのだ」と歌いました。一方、日本では政府の遣外使館に合計3回随行した福沢諭吉が、その欧米体験を本にしましたが、特に『西洋事情』と『世界国尽』は、大変啓蒙的な役割を果たし、日本人の好意的アメリカ像形成に貢献しました。このうちの「世界国尽」は7・5調の講談調で書かれ、朗読しやすく聞きやすく、一般の人にも大きな影響を与えました。河井道はこの好感情の時期にアメリカ人女性宣教師サラ・クララ・スミスに出会い、教育を受けました。ところがその後日米関係は徐々に下降線を辿り、遂に1941年日米は戦争に突入します。図表に登場する人々の中では、スミスと河井だけが、近代日本の対外戦争のすべてを経験しました。しかも戦争経験の終盤では、こともあろうに師スミスの祖国アメリカと弟子河井の祖国日本が戦うという悲劇的な経験をしたふたりであります。河井にとってアメリとは何であったのか。

河井道は日米関係が好感情の時代の1877（明治10）年7月29日に伊勢神宮の神官の家で生を享けました。明治維新の10年後とはいえ、社会は安定していたとはいえ、この年に西南戦争が起き、翌年には大久保利通が暗殺されるなど政治の世界は不穏な要素を抱えていました。日米好感情の時代とはいえ、国内は揺れていたということです。すでに明治新政府は、さまざまな近代化政策を進めておりましたが、国家統一をはかるため、西欧化を中身とする近代化を、いわば「日本化」させる目的を持って、神社制度の改革も進めていました。この神社制度改革は伊勢神宮にも及び、このことを調べておられた故富山光一先生によれば、河井の父範康は神宮内の非主流派に属していたため伊勢神宮から追われたといわれます。河井一家は1886（明治19）年、河井が満9歳の年、北海道へ移住しました。当時の北海道への移住者の心理については、いくつかのパターンがありますが、範康が追放の身となった河井家にとっては、明るい響きのフロンティア移住という言葉が用いられるようなものではなく、失意の蝦夷地行きであったと言ってよいでしょう。河井は移住先の函館で、数年前に開校したメソジスト派の女子寄宿学校に入ります。しかし『わたしのランタン』をお読みの方はお分かりのように、ある生徒の裁縫箱紛失事件で無実にもかかわらず誤解を受け、心に深い傷を負い、退学しました。その失意の時期に紹介されたのが、療養のため函館に滞在していたアメリカ人女性宣教師S.C. スミスでした。療養中ではありましたが、スミスは札幌に開学予定の師範学校の教員に応募し、かたわら自らの女子寄宿学校を建てる思いを抱いていました。やがて師範学校教員となったスミスは河井を含めて7名の生徒を連れて札幌へ移り、

自らの宣教師報酬をはたいて、スミス女学校（現在の北星学園）を創設しました。1887（明治20）年のことです。

ところで、このスミスは1880（明治13）年、宣教師として来日した際札幌を目指していた訳ではありません。スミスはニューヨーク州の師範学校で学び、ヨーロッパ留学の経歴などから考えると、当時の女性としては高学歴層に属すると考えられます。エルマイラの公立学校の教師となりますが、その平穏な日に、牧師だった兄の急逝に遭い、一転海外伝道に献身する決心をし、日本にやって参りました。任地は東京。勤め先は現在の女子学院の前身のひとつ新栄女学校で、校長という要職も務めました。しかしまもなく多分現在の病名ではリウマチを発症、宣教本部は帰国を命じました。しかし、これに従うことは祈りのうちに選びとった伝道者としてのアイデンティティを捨てることでもあり、伝道者として残るためスミスは療養に専念する道を考え、故郷の気候に似ていると言われた北海道行きを願い出ました。もし治らなければ帰国という条件で、宣教本部はこれを受け入れました。この頃、皆様もよくご存知のヘボンはある人への書簡の中で、「スミスさんはかわいそうだ」と書いています。ですから、函館時代のスミスは明るい日々を過ごしていたとはいえないのです。自らのアイデンティティを失うまいと必死で再起の道を模索していたのです。そうした日々にはスミスは河井に出会った訳です。私はこのふたりの出会いを思うたび、失意の日の出会いさえ、大きな実を結ぶことがあるのだという摂理の導きを思われ、感動を覚えます。

河井は札幌のスミスの女学校で8年間学び、新しい校名となった北星女学校を1895（明治28）年に第3期生として卒業しました。河井がスミスのもとで優れた英語力を身につけたことは勿論ですが、この学校には札幌農学校の教員たち（新渡戸稲造・宮部金吾・大島正健等）による授業があり、当時の他の女子ミッションスクールと比較すればかなり豊かな教育が行われており、その面での力もつけていたと想像されます。しかし私は、河井が、『わたしのランタン』の中で、次のように述べていることに注目しています。「勉強内容の具体的なことについては記憶もうすれてしまったが、わたしの心にはっきり浮かんでくるのは、学校の時間外にスミスから受けたほんとうの教育なのである。」（60頁）教場外で生活を共にすることを通して、カリキュラム一覧表には表現できない、重要な教育を受けたというのです。これと相似形の教育は、全寮制であった初期札幌農学校にも存在しました。皆様よくご存知のウィリアム・S・クラーク、彼は8ヶ月半しか札幌にいませんでしたが、彼と彼が伴ったアメリカ人教師たちが、学生たちに与えた影響は近代日本の精神史にさえ名を残

す人々を生み出しました。それは、カリキュラム上の諸科目は勿論なのですが、むしろ、その外でなされた教育によっています。教育学ではこういう教育を hidden curriculum と呼んだり、公教育に対置して「私教育」（私学教育ではない）と呼んだりするようですが、それが、アメリカ人教師によってなされたのです。ではスミスの場合、時間外の教育とはどんなものだったのか。現在、彫刻家本郷新が制作したスミスの胸像が北星学園にあり、それを小型にしたレプリカが恵泉の史料室にあります。これらや写真を通してスミスの姿を見ることができますが、しかしスミスの教え子のひとは、スミスの手の彫像も残してほしかった、それは節くれだった労働の手指だった、と書き残しています。河井たちを春になると園芸の作業にいざなったスミスですから、労働をいとわない人であったことは想像できますが、教え子たちの思い出のなかには教場外で窓ふきをし、床みがきをするスミスの姿が記されているのです。貧しい生徒には労働を与え、さらに対価を払ったとも伝えられています。教育の場での労働への対価の支払いは、すでに札幌農学校でもクラークによって始められ、彼の去ったあとは、別のアメリカ人教師ブルックスが引き継いでいました。クラークは士族出身の学生たちの中にある肉体労働への蔑視をなおすため、ブルックスは労働には正当な対価が支払われるべきことを教えるための教育でした。同じ北部のプロテスタント圏出身のスミスには、きっとクラークらに共通する労働観があったと想像されますが、彼女はさらにアメリカ・プロテスタント家庭の習慣、例えば週日・週末・日曜日の過ごし方、お祈りの仕方、献金や必要とあれば遠くの知らない人へも贈物をするなどの意味等々を生徒たちに伝えました。河井がスミス女学校での最後の年、スミスと同じニューヨーク州エルマイラの町から宣教師として来日、東京で働いていたクララ・ローズという女性が教員となりました。暫くしてローズは小樽で宣教活動をする事になり、河井は卒業と同時に1年間小樽でローズを助けました。ローズはやがて小樽に学校を建てるのですが、彼女がスミスにもまさる労働の人であったことをローズの生徒たちが書き残しています。粗末な作りの、小さな校舎に住み込んで自ら大工仕事もしながらの、質素・節儉の生活を送ったというのです。小樽の丘の上、吹きつける冬の北風を防ぐため、壁に補強の板を打ちつけている姿を生徒のひとりが書き残しています。彼女は、河井が北海道を去ったのち暫くして亡くなりましたが、その時着替えの洋服さえなかったと駆けつけた人たちの涙を誘いました。河井が知ったアメリカはなによりもスミスやローズその人であり、彼女らを通して見えるアメリカでありました。宣教と教育のためならば、自らの生活の場を捨て遠い海外の僻地にさえ赴く女性。これは東洋的精神風土では考

えられない女性像であり、世界史的にみても、どの文明圏も生み出さなかった女性像でありました。そして母国では彼女らのために祈禱会や献金活動が行われていました。しかし、そこに見られたアメリカは、当時の全アメリカというより南北戦争後の北部的価値観のアメリカだったと言っていいでしょう。スミスやローズの生き方は、黒人奴隷制を内容とする身分制の上に立った貴族主義的な南部の風土からは生まれえない価値観に基づくものだったと言って間違いありません。アメリカはキリスト教国といわれますが、河井がスミスらのゆえに敬意をもって眺めたアメリカは、北部プロテスタント・キリスト教のエートスに生きるアメリカでした。北海道開拓期に北海道にやってきたアメリカ人宣教師や多くの御雇外国人は、ほとんどが北部出身者であり、北海道にとってのアメリカとは北部アメリカでした。ちなみにスミスとローズの出身地エルマイラは、ニューヨーク州中央部のペンシルヴェニア州境近くにあり、南北戦争前はカナダに逃れようとした南部の黒人奴隷を支援した地下組織たる「地下鉄運動」(Underground Railroad)の秘密中継地点だったともいわれています。明確に北部的価値観に立った町でした。

ところでスミスやローズを通して知り得た女性像と共通するものを、河井はのちにアメリカのプリンマー女子大学在学中の1902年夏、ニューヨーク州のジョージ湖畔のシルヴァ・ベイで催されたYWCA協議会で、河井と同世代の女性の中にも発見し、感動を受けたことを『わたしのランタン』(148-150頁)の中に書き残しています。夕方の丘の上の集まりでのこと、ある女子学生が自分は中国に行くと言ひ、「なぜなら『世界がわたしの働き場』なのですから」と言ったというのです。この時、河井は「わたしは日本人であるばかりでなく、世界、すなわち神の世界にも属するものだということをさとり始めた」と書いています。スミスと出会って以来深まってきたアメリカ理解、あるいはアメリカ自身が追い求めていたアメリカと言ったほうがよいかもしれませんが、そうしたアメリカへの理解が、河井を新たな地平へ立たせた出来事でした。世界という地平、河井ののちに使うことばで表現するなら「国際」という地平です。

ところで話は札幌に戻りますが、河井は別のチャンネルからもアメリカ、しかも北部的アメリカの中でも特殊な少数派のアメリカに遭遇するきっかけを与えられました。新渡戸稲造との出会いです。札幌農学校2期生の新渡戸がアメリカ、ドイツでの学びを終え、博士号を得て、札幌農学校に戻ってきたのは1891年、明治24年のことですから、河井のスミス女学校4年目のときです。新渡戸はスミス女学校をも助けることになり、一時官舎がスミス女学校の隣りだったこともあり、河井の上達しつつある英語力を知った新渡戸は、河井を土曜の夜

自宅に呼んで英語の日誌を彼女に書き取りさせました（『新渡戸稲造全集』、別巻、97-98頁）。ディクテーションという形をとっての家庭教師的な役割を、新渡戸は河井に対して果たしたのです。そしてかねて日本における女子教育を考えていた新渡戸は、河井に期するところがあったのだと思われませんが、夫妻で再渡米の際、彼女をアメリカへ伴い、フィラデルフィア郊外にあるプリンマー女子大学への道を開きました。この大学は1885年にクェーカー（フレンド派）によって建てられた比較的新しい大学です。実はこの大学の開学の1885年、アメリカにいた内村鑑三は3度、クェーカーの女性伝道協会に招かれ、そのうち1回は新渡戸と一緒に招かれ日本について意見を求められました。クェーカーはこのことをきっかけに、つまり内村や新渡戸の情報に基づいて、日本へ宣教師を送ることになったのです。そしてその翌年の1886年には新渡戸自身が、留学先のジョズホプキンス大学のあるボルティモアで、クェーカー教徒となりました。日本人最初のクェーカーへの入信です。そうした意味でプリンマーは新渡戸がよく知り、信頼していた大学であったのです。

クェーカー派は17世紀イギリスに生まれ、プロテスタントの中ではいわば最左翼。信徒数では現在に至るまで少数派です。教義・制度面では最も簡素。他教派、他文化、さらには他宗教に対してさえ寛容であり、そして平和主義で知られていました。アメリカではペンシルヴェニア州、特にフィラデルフィア地方に多く入植しました。プリンマーに入った河井は、こうしてクェーカーの文化、クェーカーの色濃いコミュニティの中で学業生活を送ることになったのです。このことは、河井がもうひとつのアメリカ、勢力という点では少数派ではあるけれども平和主義に生きる人々と、そういう人々の存在を許すアメリカを知ることの意味しました。河井が多くのクェーカーの人々と交わったことは『わたしのランタン』の7章と8章の中に出てきます。なかでも、クェーカーの学生バーサ・ブラウンには、河井の表現によれば「そのびくともしない正直と誠実」に心ひかれ、生涯の親友となります。河井はアメリカに渡る前、内村鑑三が自らのフィラデルフィア時代とアマスト大学時代を書いた著作（『流竄録』、1894-1895年）を読んでおり、その情報によって内村が働いたフィラデルフィア郊外の精神遅滞児施設も訪ねています。河井が文献的にもクェーカー・コミュニティを知ろうと努めていたことが伺えます。プリンマーという大学、バーサ・ブラウンとの交わり、またクェーカー・コミュニティの訪問等を通して、すでに日本でスミスを通して長老派の信仰を得ていた河井に、一方で、クェーカー的な価値観や世界観が蓄積されていったのです。その意味で、札幌時代に新渡戸に出会ったことの意味はスミスとの出会いに並ぶ重要性を持っていたといえ



ます。新渡戸のクェーカー的姿勢については、河井が『わたしのランターン』（103-105頁）の中で描いた、アメリカ行きの船がヴァンクーバーに着いたときのふたりのやりとりの中にも滲み出ています。どうぞ後でお読み下さい。（資料1）

横道にそれますが、新渡戸と内村は親友でありましたが、書く文章は全く雰囲気違います。新渡戸は易しい日常なことばを用い、諄々と説く。対して内村は選びぬいたことばで雄渾に力強く説く。私は内村の方がストレートで分かり易く感じます。しかし、戦後東京大学の最初の総長をした南原繁は新渡戸と内村両方の弟子でしたが、新渡戸ほど、当時の一高生に影響を与えた教育者はいないと述べています。新渡戸の場合、おそらく文章には表現し切れない、人格的雰囲気があったのでしょう。発することばと人格が深く結びついていたのでしょう。

さて元に戻りますが、新渡戸がヴァンクーバーで河井に語ったアメリカ人像は、アメリカ全体というより、新渡戸が長期滞在したクェーカーのフィラデルフィアと、宗教的寛容で知られたボルティモアでの生活経験に基づいて形成されたものと考えられます。なぜなら新渡戸が学んだ時代、一方で政治腐敗や投機熱があり、南部では南北戦争後、リコンストラクション（再建）の時代を経て、再び白人の旧支配層が実質的に復権していた時代だったからです。そうした中で新渡戸は、アメリカの良質の部分、彼の精神的な拠り所となったクェーカー的価値観に生きる人々に現れたアメリカ人像を伝えようとしたと考えられます。新渡戸のクェーカー的価値観は、河井の生涯さまざまな局面で、河井のものと考え方に投影していたと言っていいでしょう。のちにカナダで客死した新渡戸の遺灰が日本へ戻ってきた時、河井はメアリー夫人の膝に顔をうずめて号泣したと伝えられていますが、そうした悲嘆を抱かせる程に、新渡戸は彼女にとって大きく、スミスに並ぶ人生の師だったといえます。

ところで、スミスを通して与えられた長老派の正統信仰に加えて、クェーカー的価値観を身につけた河井は日米関係が下降線を辿るなかで、他の多くのキリスト者とは違う緊張を余儀なくされていたと考えられます。河井が留学を終えて帰国した年は日露戦争が始まった年。翌年は戦勝により、日本が、司馬遼太郎の『坂の上の雲』がいうところの坂の上に立った年です。この戦争に対して日本のキリスト教会の大勢は、日清戦争の時と同様、反対の姿勢を取らず、僅かに内村鑑三ら少数派が反対したに過ぎませんでした。その内村も、実は日清戦争の際に義戦論の立場を取っていました。しかし内村は、戦争の現実とキリスト教のメッセージの基本に立って歴史への関わり方の考え直しを迫られま

す。当時優勢だったキリスト教的文明史観、社会進歩思想から脱却することにより、非戦論に立ち至り、日露開戦に激しく反対したのです。留学前に内村の作品を読み、プリンマーでクェーカー的価値観を身につけて帰国した河井ですから、内村の非戦の主張にも関心を示したと推測されますが、それを証言する史料は現在のところ見当たりません。しかし河井が第一次大戦の時に書いた非戦の、主張のストレートで歯に衣を着せない表現などを見ると、内村の非戦論を読んでいたのではないかとさえ思われます。資料に内村の反戦・非戦論の一部と、河井の第一次大戦時の主張を載せておきました。(資料2・3・4・5)

いま反戦と非戦というふたつの語を私は使い分けました。反戦ならばあの戦争は正しかったけれども、この戦争は間違いだから反対するということも含まれると捉えるからです。個別の反戦の場合、他の場合によっては戦争はありうる。つまり可戦の立場に変わらないのです。ですから日清戦争後の1896年に内村が発表した「寡婦の除夜」(資料2)は、戦争未亡人の悲劇と、彼女を顧ない国の冷たさを衝く反戦歌ではあっても、まだ非戦論ではありません。内村が反戦の立場から非戦論に到達するのは、キリスト者としての歴史の見方が確立する、「寡婦の除夜」発表の数年後のことであり、1903年に至って「戦争廃止論」(資料3)を皮切りに明確に非戦論を展開しました。これに対して、河井の場合は、我々が知る史料に関する限り、初めから非戦です。(資料4・5)

第一次大戦の際のアメリカ大統領はウッドロー・ウィルソンです。彼は長老派の牧師の息子で、強い潔癖な宗教的信念の持ち主として知られ、第一次大戦では最初中立の姿勢を取りました。河井は同じ長老派のウィルソンに期待するところがあつたかも知れませんが、しかし彼は結局参戦してしまいました。あるクェーカーの本によると、ふつう宗教的な人間でも悪と戦争を天秤にかけた場合、戦争のほうがより小さい悪 (lesser evil) だとして、戦争を採ってしまうのだといいます。しかし、クェーカーは戦争を選ぶことはキリストの教えに反すると考えるがゆえに、非戦が国法に違反する犯罪とされるならば、自分たちは、戦争に行くより牢獄に行くのだといいます。嘲笑と軽蔑的となってもそれを選ぶといいます。この立場は戦争の度毎に貫かれ、アメリカでは独立戦争のときも南北戦争のときも貫かれました。しかし、その積み重ねの中から良心的兵役拒否が制度的に認められるようになりました。人は上に立つ政治的権力や国法に抵抗する権利を有するという考えは古くからありましたが、秩序や法を何らかの形で破る訳ですから、違法性があり、これを行行使する者は、受刑を覚悟しなければなりません。しかし日頃は良き市民たるクェーカーたちの、こと戦争に関しては、断固として戦争参加を阻む実践の中から、宗教信念による良心

に基づく行動が認知され、兵役拒否が合法化されるに至ったのです。ただし兵役に代わる代替業務として、病院勤務や社会奉仕的な仕事などが課せられます。しかし、それをすら拒否する者が出、彼らは懲役刑を課されましたが、ともかくも反・非戦主義者に制度的手当がアメリカでは施されるようになっていたのです。今回、この講演を準備して驚いたのは、クエーカーの人々が議会でロビー活動をしていたことを知ったことです。ふつうロビー活動というと特殊な経済権益や移民出身国の国益擁護等々のために行われるのですが、クエーカーの場合、はっきりとは調べられませんでした。兵役拒否を担保するためだったらしく大変驚きました。クエーカーは、この点では決して非政治的ではなかったようです。河井の、まるで内村鑑三を思わせるようなストレートな表現による1914年の文章は、今述べたようなクエーカーの主張や実践についてのかなりの知識がベースになっているのではないかと思います。この時期の良心的兵役拒否者は約4000人といわれますが、この数字を、河井は第二次大戦前のアメリカ旅行の報告のなかで使っており、日本人の中ではかなり正確な情報の持ち主だったと言っていると思います。

1914年（大正3年）夏、第一次大戦勃発の報が日本に届いたとき、時の元老井上馨は「大正新時代の天佑」と叫んだといわれ、アジア侵出をにらんで、すぐさま参戦しました。国論も戦争参加推進の雰囲気がありました。そうした中での河井の発言です。アメリカのように異議申立ての伝統もなく、兵役拒否という制度的手当もなく、また女性の参政権もない時代の、女性による非戦の主張です。政府批判でもあります。戦争が始まると、ふつう「右であれ左であれわが祖国」という運命共同体論的な愛国心が頭をもたげて事の是非は脇において戦争遂行に流れていってしまうのですが、河井にそのような愛国心はありません。資料6・7の内村鑑三と共通する愛国心の持ち主だったと言っているでしょう。いずれにせよ、河井のこの非戦の主張と、それが当時の政府批判にもなっていることは、驚くべき勇気といわざるを得ません。

この資料4・5の論説の中で、河井は非戦・平和のために教育の必要を訴えています。それが時を経て1929年恵泉女学園創立の際の精神の中に具体化しました。『わたしのランタン』の該当箇所（266-267頁）をご覧ください。（資料8）「規定されているカリキュラム」とは、学校設置基準が要求する学校創設のための、いわば必要条件。それに3つの特色ある科目を加えた訳です。「キリスト教」は他のミッションスクールやキリスト教主義学校と共通しますが、「国際」と「園芸」をうたったミッションスクールやキリスト教主義学校を私は他に知りません。いや「国際」に関しては、国際理解の関心とかという表現で他

にもあるのだという方もおられるかも知れませんが、下線を施したところ「戦争は、婦人が世界情勢に関心を持つまでは決してやまないであろう。それなら、若い人たちから —— それも、少女たちから始めることである」という、戦争のない世界を目指すことを、これだけはっきり言い切っている創立者を、私は他に知りません。

第一次大戦は1918年に終わり、1920年に国際聯盟が発足しますが、提唱国のアメリカが国内批准に失敗して不参加。戦後の国際情勢は不安定なまゝ推移します。また日米関係も下り坂にありました。日米関係の悪化には、アジアにおける日本権益の増加、アメリカの移民制限政策等いくつもの原因が考察されなければなりません。ほとんど論じられないアメリカ人宣教師の、朝鮮半島における日本の官民の振舞いについての観察の報告も落としてはならないものと私は考えています。韓国併合後の日本の強圧的しかも侮蔑的植民地支配の姿が、本国への宣教報告書の中に登場しているのです。なかでも1919年の朝鮮半島で起きた独立運動への弾圧。その一環である堤岩里（チアムリ）教会での焼打ち虐殺事件はいち早くアメリカへは伝えられましたが、日本では限られたキリスト者しか知ることができませんでした。河井には再び、戦争は起こるかも知れないという思いがあったのではないかと。そうした中での学校創立だったといえるのではないかとさえ私は思うのです。

経済的困難な中でも1929年に恵泉は開校。しかし、その2年のちの1931年には満州事変が起こり、太平洋戦争を含めていわゆる15年戦争期に入ります。中国大陸での実質的戦争期の1933年には、河井のいわば後盾でもあった新渡戸がカナダで客死、1938年には新渡戸夫人のメアリーが、軽井沢で亡くなりました。メアリーは、最後の日々、家の窓を開けさせなかったそうであります。聞くと「今、中国で日本軍と中国軍が戦争しているでしょう。砲弾の硝煙の臭いがここまできているではありませんか。窓を開けてはいけません。火薬の臭いがしてきます」と答えたそうです。（佐藤全弘『新渡戸稲造に学ぶ』、教文館、2012年、266頁）老齡の病ゆえのことばであったかも知れませんが、痛ましいまでの平和主義です。2人のクェーカーの先達を失い、河井は平和主義に関してほとんど孤塁に立たされました。そんなこともあったのでしょうか、1941年の春に河井は、内村と新渡戸の弟子で、その3年前平和主義の主張で東大を追われ非国民視されていた矢内原忠雄（戦後南原繁のあとの東大総長）を卒業礼拝によびました。緊張を伴う決断であったでしょう。そしてその半年後の真珠湾攻撃です。太平洋戦争中、平和主義にしてかつ多くの生徒を預る学校責任者の河井は、信仰と順法の困難なはざまを辿ることを余儀なくされました。その河

井が、おそらく人生で最大の勇気を払ったに違いない出来事についての証言があります。資料9の神山妙子氏（青山学院大学名誉教授）の文章です。これと同じ内容を神山氏は、1997年この多摩キャンパスの河井記念礼拝で「ひとりでもできる」と題して話されました。この礼拝講演を聞いて私がとっさに思ったのが、日本による真珠湾攻撃直後アメリカ連邦議会での対日戦争決議において338の賛成票に対し、たった一人反対票を投じたジャネット・ランキンのことです。日本に女性の参政権はまだなかったけれども、河井の発言はランキンの一票にも相当する出来事だったのではないかと。神山氏の文章中の「講師陣には当時のキリスト教会の錚々たるメンバーが名を列ねていたが、そうした社会情勢のもとでは当り障りのない話が大部分を占めるのも、ふしぎではなかったのかも知れない」というのは、当時のキリスト教指導層への痛烈な皮肉と批判です。河井はランキンのように政治の世界では発言できなかったけれども、親友のバーサ・ブラウンのようにはなれた。河井は『わたしのランタン』の中で、先程も紹介しましたが、キューカーのバーサに心ひかれたのは、彼女の「そのびくともしない正直と誠実のためであった」と述べています。ずっと祈り続けていた平和のために、この時、河井は正直で誠実であることによって、日本のバーサになったのだといえるように思うのです。ひとりでも行動するという意味では、スミスやローズの道を河井も歩んだのだともいいえます。しかしその二人にはるかに優る平和への思いを抱いていたがゆえに、くずおれそうになりながらも、ひとり立った姿に預言者のそれに似たものを私は感じざるを得ません。次の児童文学者村岡花子の河井道観は、今、私が言おうとしたことと重なり合います。「河井道女史の発言には、世界共通の『憂い』があった。私はいつも考えるのだが、河井女史のもつ偉大な憂い—悲願というものは、彼女の性格のなかで見落としてはならない点である」。（『日本キリスト教教育史 人物編』、創文社、1977年76頁）

最後にひとこと加えさせて頂き、私の話を終わろうと思います。私は河井が平和に関しては制度的無援の中で発言したといたしましたが、戦後私たちは河井の時代とは比較にならない自由な発言を許されてきました。それは制度的支援があったからです。それは現行憲法です。しかし、昨今の憲法改定の議論の中には9条改定はおろか、国益のために個人に義務を課し、思想・信仰・表現の自由さえ制限しようとするものさえあります。平和主義に対して制度的無援の、そのゆえに河井が苦しんだような社会に戻そうとしているとしか思えない動きです。現憲法の理想をしっかりと追い、平和主義を無援状態に追い込まないことこそ、さまざまな価値を認め合い、なおそこから普遍的なものを大事にしよう

とした河井やその思想的背後にいる新渡戸や内村の志を生かすことになるのではないかと思うのです。

以上をもって私の話を終わらせて頂きます。長い間、ご清聴ありがとうございました。

< 資料 >

1 『『あなたをアメリカに連れてきたのは、ただ知識を高めるだけではない。もしそれが唯一の目的だとしたら、日本にいてもあなたが生涯かけて吸収しきれないほど学ぶことがある。ここでは、あなたのほんとうの教育は、本や大学の壁のそとにあるのです。それからもう一つは、——多くの偉大な人物と接触するようになるでしょう。『日本には偉い人物はいないのですか？こんな遠くまで、偉い人に会いにこなくてはいけないのですか』。わたしは愛国心が少し傷つけられてたずねた。『そう、日本にも偉い人物はいます。しかし祭り上げられています。ところがアメリカでは、台所に、学校に、人生のあらゆるありふれた路上でみつけれられるのです。キリスト教の大きな働きの一つは、人格を、社会の階級にはかかわりなく、成長させることなのです。日本では偉い人物というものを、地位の高い人とか、家柄のよい人とか、大学者だけの中に探す傾向があります。実にすばらしい人たちが、偶然この世的には低い身分にあるために、見落とされることがよくあるのです』。こうしてわたしの尊敬する先生は、この新しい都会での、わたしの最初の教訓を与えてくださった。これこそわたしがけっして忘れられない教訓である』。

(『わたしのランタン』、原文英文、1939年)

2 寡婦の除夜

月清し、星白し、  
霜深し、夜寒し、  
家貧し、友尠し、  
歳尽て人帰らず、

思は走る西の海

涙は凍る威海湾  
南の島に船出せし  
恋しき人の迹ゆかし

人には春の晴衣、  
軍功の祝酒  
我には仮りの竹住  
独り手向る關伽の水

我空ふして人は充つ  
我衰へて国栄ふ  
貞を冥土の夫に尽し  
節を戦後の国に全ふす

月清し、星白し、  
霜深し、夜寒し、  
家貧し、友尠し、  
歳尽きて人帰らず。

(内村鑑三、1896年)

- 3 余は日露非開戦論者である許りでない、戦争絶対的廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾うして人を殺すことは大罪悪である、爾うして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない。

(内村鑑三「戦争廃止論」、1903年)

#### 4 病院と戦争

私はかういふ事（注 弱者救済の施設・病院・赤十字等慈善事業がキリスト教精神から創られ、大切な仕事をしていること）を考へながら現在全世界の上を掩ふておる戦争の事を思ひ及んだので御座います。彼と是とは天地の相違ある事柄でありまして戦争程愚かな非文明的現象が、またとありませうか（以下下線は大山）と感じたのであります。（中略）啻に有為なる壮年者を喪ふといふばかりでなく、ひいて国家の損失一家の困難、更に其の悪影響の及ぶ事は一通りではないので御座います。（中略）如何に親が名誉の戦死を遂げたと申しても其遺族が糊口に迷ふて（中略）内戦や出稼をせねばならぬ年

若の未亡人も出来る場合、自然と法律上道德上の罪人を出すような事にもなるのである（中略）

又、戦争の損害は之れに止まりません、国家経済の上から打算しても不経済の極みであるといふ事は誰しも承知しておる事であります。（中略）

さうであるばかりで御座いません、平時に於てもこの軍事方面に費さるゝ費額は何れの国に於ても実に容易ならぬ夥額で御座いまして、欧州辺りの先進国でも軍備破産を唱へる（中略）

而して更に、人間を教育する方面に対する努力は如何であるかと思ふと、之はまた実に戦争軍備などの方面に比しては微々たるものであって到底日を同ふして話す事は出来ないのであります。（中略）之れが全世界を通じての情態であるとすれば、我等女子といへども対岸の火事視して居るべきではありません。斯る徒費のみならず社会家庭個人に及ぼす悪影響に対しては断然戦争行為の撲滅全廃を唱導せなければなりません。

世には随分誤った意見を持つ人もあって、子供に尚武の氣象を与へなければ柔弱な臆病者を造るといふような点から戦争熱に捉はれる者もあるので御座いますが、私は特に母たり師たり姉たる方々に申上たい、その様な謬見があらば一刻も早く其思想から離脱されねばなりません。銃や剣を以て人を驚かせ他を脅かすが如き、或は之を防禦的に使用すると申しまして決して褒めた事ではありません。（中略）

最早勇武を以て誉とする時代は過ぎ去りました。殺伐切傷は人事界の恥辱であります。私は基督信徒の家庭に於て其子女を教育するに戦乱時代の物語を以て武を奨励したり、武器の玩具を与へたり、唱歌に血とか敵を切れの殺せのといふような詞を用ひたり、又は人殺の真似をさせたり、仕て見せたりする如き事は全廃してほしい。（中略）剣は元來臆病者の持つべきもの。真の平和を主張し其主義の為に倒るゝ者こそ本当の勇者であると私共は確信致します。剣を持つものは剣をもって倒れん、柔和なる者は幸なり其人は地を継ぐ事を得なければなりとはキリストの御詞で御座います。どうしても世に勝つものは軍隊でも武器でも御座いません、我等の信仰する基督の精神で御座います。此の精神を我々婦人の間に益々勃興せしめ、子女子弟を教育するに当り此精神を鼓吹して人々個々が武器を捨て敵を愛する様に為すべき義務があると思ひます。国家を護るは固より男子の大責任であり、之に対し我等婦人は多大の敬意と感謝の念を以て居ります。併し一方に於ては真個の平和主義を子孫に鼓吹し以て国の要となさしむる為には婦人こそ国家を護る者と言はなければなりません。又斯く公認される様にならなければなりません。何



卒、基督教を信奉する我等は、お互に此の忌むべき戦争其の物を廃絶するは勿論、これに關聯せる謬見を排除し尽して一日も早く我が国のみならず、全世界の上に真の平和あらしめ給へと祈る様に切に希ふて止まないのであります。

(河井道、『女子青年界』、1914年9月号)

## 5 私は戦いは嫌い

私は絶対に戦いは嫌いで、何誰の前でも非戦を主張するので御座います。ですから今度の戦争に就いても、実に忌わしく思っておるので御座います。多くの国を騒がせ、多くの人命を絶ち、人類に苦を与えて、何がよいのでありましょう、私は馬鹿な事と思います。ですから私は戦時の婦人だからと言って武を奨励したり、又子供に戦争の真似をさせたり、武器の玩具を与えたりする事は、どうぞ止めたい、子供の時から戦争の悪い事を充分解らせたいと思います。私共が人道に重きを置いて考えれば、戦争なんかしておられないではありませんか。私は兵士の中からも自分は戦いをせぬと、飽く迄主張し主義の為に死するも厭わぬと言うような人があればと思う位で御座います。私は今度の戦いに就いても誠にいやな思いを致します。英国は弱い、仏国は弱い、独逸は強い、露国は強いなど言いますが、畢竟強と言われる国は、弱いと言われる国よりも野蛮だと言ってもよい、常識の発達した国民は真面目に戦ってなどいられないでしょう。ですから弱い国は、却て進歩している。日本は強いと言われれば、まだ進んでいないのだと、私は思います。ああ戦いはいやで御座います。

(河井道、『新女界』、1914年10月号)

## 6 余輩は国のために神を信ぜず、神の為めに国を愛す。

(内村鑑三「警世の理由」、1901年)

7 私の愛国心は軍国主義を以て現はれない。所謂国利民福は多くの場合に於て私の愛国心に訴へない。(中略)私は日本を正義に於て世界第一の国と成さんと欲する。(中略)日本の為に日本を愛するに非ずして、義の為に日本を愛するのであると言ふならば多くの日本人は怒り或は笑ふであらう。然し乍ら此愛国心のみが永久に国を益し世界を益する愛国心であると信ずる。

(内村鑑三、「私の愛国心に就て」、1926年)

8 「わたしの学校！それはどういう種類であるべきだろう。規定されているカリキュラムとともに、実践的な宗教教育を与えるかたわら、国際の勉強をその教育の具体的な教科目とする方法はないものかと私は考えた（中略）戦争は、婦人が世界情勢に関心を持つまでは決してやまないであろう。それなら、若い人たちから —— それも、少女たちから始めることである。（中略）それからまた園芸はどうであろうか。（中略）こうしてわたしの頭の中には、普通のカリキュラムに、キリスト教と園芸及び国際というような新しい科目を加えた高等女学校の構想がだんだんと形を成してきた。

（『わたしのランターン』、原文英文、1939年）

## 9 私の河井道先生

河井道という強烈な個性が、私の臉に焼き付くことになるのは、太平洋戦争も後半に入ってからのことである。キリスト教を見る眼は、日に日に酷しさを増し、校門付近で私服の刑事から、「靖国神社の参拝についてどう思うか」と聞かれた生徒がいるという噂まで耳に入る頃、東山荘で開かれた夏季学校に参加することになった。講師陣には当時のキリスト教会の錚々たるメンバーが名を列ねていたが、そうした社会情勢のもとでは当り障りのない話が大部分を占めるのもふしぎではなかったのかも知れない。最後に唯一人の女性のスピーカーとして立ち上がったのが河井先生だった。先生は開口一番、「そもそもこの戦争はすべきではなかったのです」と断言した。場内は水をうったように静まりかえり、それまでの沈滞ムードは消し飛んだ。次の瞬間、私は烈しい恐怖に襲われた。廊下で立ち聞きをしていた憲兵が、扉を蹴立てて室内に踏み込んでくるような錯覚を覚えたからだ。しかし壇上の先生は、自らの信念を語る人のみがもつ沉着きと、凜とした態度を最後まで崩すことはなかった。

（神山妙子、『証言集 河井道一人・信仰・教育』、2000年、所収）

〔おおやま・つなお 元短期大学学長・内村鑑三記念「今井館教友会」理事〕

（註）本稿は、2013年5月25日スプリングフェスティバルで行われた、大学創立25周年記念講演「河井道とアメリカー建学の精神の源流を探るー」の草稿に、ご本人の加筆をいただき記録としたものである。